

# 「ものか」の反語文について\*

山口佳也\*\*

## 一 はじめに

「ものか」という形を末尾に持つ文は、古くから、多く、反語を表す文や、詠嘆（意外なことに対する驚き）を表す文となることが知られている。本稿は、とりあえず、そのうち、反語を表す文について、その反語の意味の生まれてくる仕組みを、近・現代語の用例をもとに、主に構文論的な観点に立って探ってみようとするものである。以下、「ものか」というときは、特に断らない限り、反語文におけるそれを指すこととする。資料には、夏目漱石「吾輩は猫である」(CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪)による、以下出典名としては「猫」と略記)と、「CD-ROM版 新潮文庫の1000冊」を用い、補足的に適宜その他の明治以後の文学作品の用例を使用することとする。なお、その場合、「もんか」「ものですか」「もんですか」などは、「ものか」の変化形と認める。

## 二 「ものか」の反語文の構造

周知のように、「ものか」を末尾に持ち、反語を表す文(以下、「ものか」の反語文と呼ぶ)は、上代から現代に至るまで、各時代

を通じて引き続き用いられてきた。そのためもあってか、現在、文法書や国語辞典・古語辞典の中には、「ものか」を、全体で一語の、反語(及び詠嘆)の終助詞の扱いとしているものが少なくない<sup>1)</sup>。

しかし、改めて考えてみるに、「ものか」は、本来、形式名詞「もの」に疑問の助詞「か」が結びついてできた連語であることは明らかであり、文末にそのような形をとるについては、構文論的にそれなりの理由があったと考えられる。そして、その特徴が近・現代語において全く消滅しているとは考えにくい。それを考慮に入らずに、単に「ものか」を反語の終助詞として済ますことは、「ものか」の文から反語の意味が生まれてくる仕組みを追究する手掛かりを自ら放棄するばかりでなく、「ものか」の文の真に正確な意味ありを見誤ることもなりかねない。我々としては、「ものか」という本来の語句の組み立てにこだわったところから出発するのが適當であろう。

その立場から、まず再確認しておくべきことは、次の二点である。

- 1 「ものか」の「か」は「であるか」相当であるということ。
- 2 「もの(か)」に前接する一連の語句は、主文を構成する語句ではなく、連体修飾節を構成する語句であるということ。

上代から現代に至るまで、文末において、「断定の助動詞+か」とあるべき箇所を、多く単に「か」で済ませていることは、周知の

ことであろう。<sup>(2)</sup> 現代語でも、口頭語において最も標準的な断定の助動詞「だ」に助詞「か」を付けて言うとき、例えば、「学生だ」「暖かくなったからだ」などを疑問の形で言うときは、普通、単に「学生か」「暖かくなったからか」などと言う。<sup>(3)</sup> この場合の「か」は、「であるか」相当の「か」であると言える。なお、丁寧表現において、「学生ですか」「暖かくなったからですか」「学生でございませうか」「暖かくなったからでございませうか」、また、文章語において、「学生であるか」「暖かくなったからであるか」などの形が用いられるが、このことは、とりもなおさず、「学生か」「暖かくなったからか」などの「か」が「であるか」相当であることを傍証していると言える。反語文における「〜ものか」についても同様で、丁寧表現では、「〜ものですか」「〜ものでございませうか」が用いられる。ただし、文章語としては、反語文でも、「〜ものであるか」でなく、やはり、「〜ものか」が用いられる。いずれにしても、これらの「か」が本来「であるか」相当であることに変わりはない。

次に、「もの+か」の「もの」が本来形式名詞であるということ、また、それに前接する語句が本来連体修飾節であるということは、だれも認めることであろう。この際、そのことが構文論的に持つ本来の意味を改めて思い返してみる必要がある。

以上から、「ものか」の反語文は、単に文末に「ものか」が付いた文というよりは、本来「連体修飾節+もの（+断定の助動詞）」の形の述部を持つ一種の名詞文に、更に「か」が付いた文と見るのが正しいと思われる。

典型的な名詞文は、  
X||は Y|だ/である

という構造といえるが（以下、Xに相当する部分には二重傍線、Y

に相当する部分には傍線を施す）、そのことから、典型的な「ものか」の反語文の構造は、一応、

X||は 連体修飾節 もの (である) か …………… I

という構造であることが想定される。ただし、この場合の連体修飾節の連体修飾が「内の関係」のそれであるか、「外の関係」のそれであるかは、<sup>(4)</sup> この段階では不明であるとしておく。

### 三 修正「ものか」の反語文の構造

では、実際の状況はどうであろうか。試みに、「吾輩は猫である」について調べてみたところ、出現した「ものか」の反語文は、「〜ものか」の形のもの37例、「〜ものですか」の形のもの7例、「〜ものか」の形のもの7例、「〜ものですか」の形のもの11例、計62例であった。これを、「Xは」「Xが」などの現れ方から再分類した内訳は、次のとおりである。

① 「X<sub>1</sub>は(X<sub>2</sub>が)〜」の形のもの 1例

この場合の「X<sub>2</sub>が」が連体修飾節中の要素であるかどうかは、この段階では、不明。

1 心の落着は死ぬまで焦ったって片付く事があるものか。

(猫)

② 「Xが〜」(「X<sub>1</sub>もX<sub>2</sub>も〜」を含む)の形のもの 40例

この場合の「Xが」が連体修飾節中の要素であるかどうかは、この段階では、不明。

2 そんな古いものが役に立つものか。(猫)

3 九時に出頭しろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか。(猫)

- 4 なに、己がそんな卑劣な男なものか。(森鷗外「雁」)
- 5 意味も何もあるものか。(猫)
- 6 そんな愚な男がこの国に居るものか。(猫)
- 7 誰が警察から油壺を貰ってくるものか。(猫) など。
- ③ 「Xは」も「Xが」も現れないもの 21例
- 8 「こいつは大変だ。奥方はちゃんと居るぜ、君」「ウフフフ」  
と主人は笑いながら「構うものか」と云った。(猫)
- 9 「叔父さんの様なのは一人も居ないわね」「居るものですか。無類ですよ」(猫)
- 10 「夫で先ず実験上差し支えない位な球を作って見様と思いでね。先達てからやり始めたのです」「出来たかい」と主人が訳のない様にきく。「出来るものですか」と寒月君が云ったが、(猫)
- 11 小供は平気なもので「あら、でも今日は御休みよ」と支度をずる景色がない。「お休みなものですか、早くなさい」と叱る様に言っけて聞かせると、(猫) など。
- このうち、③は、①ないしは②のタイプの文の省略文であると考えるべきであろう。反語文は、やや感情にまかせて、吐き出すように言い放つことも多く、当事者(特に話し手)に自明のことは、言語化しないで済ませてしまうことがありがちなことは理解されよう。ちなみに、我々の語感から言って、例8では「私が／だれが(そんなことに)」、例9では「叔父さんの様な人が」、例10では「私に)そんな球が」、例11では「今日が」などが、省略された語句として、想定されるであろう。

このようにして、③が②に準ずるものとすれば、「ものか」の反語文の大勢は、②で占められていることになる。そこで、改めて、例えば例2について、その構造を考えてみるに、まず、「そんな古いものが役に立つ」の全体を、「もの」に前接する連体修飾節と見る見方があり得る。その場合、自動詞相当の「役に立つ」に対する必須補語は、「そんな古いものが」ですべて出尽くしているところから、その連体修飾節は、「外の関係」の連体修飾として「もの」にかかっていると考えられる。その場合、「Xは」に相当する語句が省略されていることになる。省略されている「Xは」としては、「のだ」の文や、解説的用法の「ものだ」の文の場合にならって、言語的又は非言語的文脈中のある事態を先行詞とした「それは」などの語句を想定することができそうだ。これを図式的に示せば、

2' (ある事態に関して) それは そんな古いものが役に立つもの(である) か。

ということになり、意味は、「(ある事態に関して)それは、そんな古いものが役に立つという事態であるか。(いや、そんな事態ではない。)」といったぐらゐのことになるうか。しかし、原文に当たってみても、前後に、「それは」の先行詞となりそうな事態は見当たらないし、文の意味そのものも、上記のようなものとは思われない。もう一つの見方として考えられるのは、「役に立つ」の部分だけを、「もの」に前接する連体修飾節と見る見方であろう。この場合は、「役に立つ」に対する必須補語として、「くが」が欠けているので、その連体修飾節は、「内の関係」の連体修飾として「もの」にかかっていると見るのが適当であろう。一方、「Xは」に相当する語句がなく、代わりに、「Xが」(「そんな古いものが」)が存在することが注目される。この、二番目の見方によれば、初めに想定され

た形とは異なる、次のような形が現出していることになる。

2" そんな古いもの が 役に立つもの (である) か。

次に例7について考えてみる。この例でも、一応、例2の場合と同様に、「誰が警察から油壺を貰ってくる」を前接の連体修飾節とし、それが「外の関係」の連体修飾として「もの」にかかっているとして、「(ある事態について)それは、誰が警察から油壺を貰ってくるという事態であるか。(いや、そんな事態ではない。)」という意味の文と考えることができる。しかし、やはり、これも、実情に即したものとは思われない。

一方、「警察から油壺を貰ってくる」を前接の連体修飾節とし、それが「内の関係」の連体修飾として「もの」にかかっていると見た場合、初めに想定された形と異なり、やはり2"と同種の、次のような形を認めることになる。

7" 誰 が 警察から油壺を貰ってくるもの (である) か。

このように見えてくると、標準的な「ものか」の反語文の構造を、次のように想定し直すのが適当ではないかと思われる。

X が 連体修飾節 もの (である) か。 …………… II

この場合の連体修飾節の連体修飾は、「内の関係」のそれである。

「ものか」の反語文では、例7のように、「X」の位置に、もともと「は」を伴って題目となる可能性のない「疑問語」が現れることが少なくないという事実も、この形を標準形として立てることの妥当性を示しているように思われる。ちなみに、「ものか」の反語文に限らず、一般に、反語文は、題目を持たない無題文であるのが普通のようなのである。例、

12 「どうしたんでしょ」 「おれが知るか。(略)」 (井上ひさし

「下駄の上の卵」)

13 二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるか。(夏目漱石「坊

つちやん」)

例1のような、題目を備えた反語文は、数が極端に少ないだけでなく、やや特殊な感じがする。Iは、IIから派生した、特殊な文と考えるべきではなからうか。これについては、後でもう一度取り上げる。

IIは、いわば無題の名詞文ということになるが、文法的に特に許されない形とは言えないであろう。連体節や一部の連用節、また、述部節の内部では、「彼が学生であることは、く」 「彼が学生であるならば、く」 「私の家では、長男が大学生で、次男が高校生です。」などのように、ごく普通に無題の名詞文が現れる。「ものか」の反語文中の「Xがくもの(である)か」も、それらの形に準ずるものと考えてはどうだろう。なお、反語文の裏返しともいうべき、「ものではない」の文というのがある(例「そんな角張った事をして物が纏まるものじゃない」(猫)、「そのあいだ中、わたしが夫人にへばりついていられるものではない」(原田康子「挽歌」)。その場合も、「くものだ」に対応するのは、「Xが」である。

なお、一般に、主語に「Xは」でなく「Xが」を持つ名詞文では、その「Xが」にプロミネンスが置かれて、いわゆる総記の意味となるのが普通であるが、連体節や一部の連用節、また、述部節の内部の名詞文の「Xが」は、プロミネンスが置かれることもなく、総記の意味でもない。「ものか」の反語文や、反語文の裏返し「ものではない」の文の「Xが」も同様である。「ものか」の反語文にも、プロミネンスが置かれるが、その置かれ方は、総記の文のそれとは全くの別物である。これについても、後で触れる。(8)

## 四 IIの形の問題点

IIを「ものか」の反語文の標準的な形と認める上で、幾つか疑問が生ずる可能性があるので、それについて考えを述べておく。

その一は、「ものか」の反語文では、当然のことながら、「もの(である)」という形で必ず形式名詞「もの」が用いられるわけであるが、それらの「もの」に共通した意味が存在していると言えるだろうかということである。実は、形式名詞の「もの」について、筆者は、先に、別稿<sup>9)</sup>で、かなり抽象度の高い意味しか表さないもので、常に被連体修飾語の位置に立ち、とりあえず名詞の役割を果たす代理名詞的性格のものではないかということ論じた。「もの」が、そのような、「物的・者的」「こと」などの意味を超越した性格のものであることによって、「Xはものだ」の文において、「X」の位置にどのような名詞が来て、「もの」は、うまく、その「X」と対応して、その役割を果たすことができることになると思われる。「ものだ」の文の「もの」が、時に、「物的」「者的」「こと」などに見える場合もあるが、それは、単に「Xは」の「X」の意味に引きずられて、そう見えるにすぎない。「Xがもの(である)か」の文の「もの」についても全く同じことが言えるのではなからうか

その二は、「ものか」の「もの」に前接する部分では、いわゆる「ガノ交替」の現象が見られないが、それはなぜかということである。「ガノ交替」は、従属節(現代語では、主として連体修飾節(名詞節))中での特有の現象であるので、それが生じないことは、それを取り巻く一連の語句が連体修飾節(名詞節)でないことの証拠とされることが多い。確かに、筆者が今回調査した資料でも、

「ものか」の「もの」を修飾すると見なされた一連の語句中に「名詞+が」の代わりに「名詞+の」が用いられた例は見当たらなかった。「もの(か)」に前接する一連の語句が連体修飾節の性格を薄めつつあることは否定できないようである。しかし、この場合は、もともと連体修飾節中にガ格語が現れる可能性が少ない構造になっているふしがあることに注目しておきたい。よく観察すると、「ものか」の「もの」に前接する連体修飾節の連体修飾は、「内の関係」のそれであり、しかも、ガ格の名詞が底(被連体修飾語)に回る関係になっているもの(事実上、その底の位置を代理名詞「もの」が占めているわけであるが)がほとんどであるということが分かる。

つまり、「ものか」の反語文の場合、もともと、「もの」に前接する連体修飾節中には、ほとんどガ格語が現れない構造になっているのである。なお、ついでに触れると、その結果、「ものか」の反語文では、あたかも文の主語の「X+が」と「もの」にかかる連体修飾節中の述語とが主述関係を構成し、「か」でなく「ものか」が終助詞であるかのような様相を呈することになっている。たとえば、例2では、「そんな古いものが」と「役に立つもの(である)」が主述の関係をなし、それを終助詞「か」が包んでいるのではなく、「そんな古いものが」と「役に立つ」が主述の関係をなし、それを終助詞「ものか」が包んでいるかのように見えるわけである。これを図示すれば、次のようになる。

〔そんな古いものが役に立つもの(である)か〕か。……………  
(本当の構造)

〔そんな古いものが役に立つ〕ものか。……………(見かけ上の構造)

その三は、一、二に続いて起こってくる問題で、例12、例13など

のように、普通の述語に「か」を付けた形（上の、見かけ上の構造の「ものか」を「か」に替えた形）で十分反語文となり得るのに、なぜ、多くの反語文では、述語をわざわざ「〜もの（である）」と名詞述語化し、それに「か」を付けた構造をとる必要があるのかということである。特に、例4のように、「卑劣な男だ」という名詞述語を、更に「卑劣な男なもの（である）」と二重に名詞述語化した文では、その感が更に強い。これについては、広く「ものだ」の文と絡めて考える必要があるので、ここで結論的なことを言うことはできないが、筆者は、例えば、「動く」とか「悲しい」とか言うよりも、「動くものである」「悲しいものである」などとする方が、一般論としての表現の性格をより強める効果があるのではないかと考えている。これは、六で述べることとも関係があると思われるので、そちらも参照されたい。

その四は、語順の関係で、厳密にどの部分を連体修飾節と認めるべきかということである。分かりにくい例があることは確かである。例えば、

14 どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんてものが在るもんですか。（「猫」）

では、「在る」の部分だけを連体修飾節と認めると、「どこの国に」のかけ先がなくなってしまう。この場合は、意味から言って、語順にこだわらずに、「どこの国に 在る」を連体修飾節と認めるのがよいと思われる。語順を変えて言うのも、何らかの強調意識の表れではないかと思われる。反語文には、同様の例が少なくない。

例、

15 女なんか何かわかるものか。（「猫」）

16 あんなものの娘を誰が貰うものか。（「猫」）

なお、例6、例7のように、穏やかな語順で述べた例も、もちろん存在する。

##### 五 「ものか」の文に反語の意味が生まれる理由

IIを「ものか」の反語文の標準的な形と認めるとして、では、そこからどのようにして反語の意味が生まれてくるのであろうか。ポイントになることは、三つあると思われる。

その一は、この形には、「Xが 連体修飾節+もの（+である）」という名詞文が含まれているわけであるが、その「X」と「Y（連体修飾節+もの）」に、その発話の当事者（主に話し手、ついでに聞き手）にとつて、もともと「XがYだ」という形で結びつけられるはずのないものがことさら並べられている傾向があるということである。例えば、例2では、「こんな古いもの」が「役に立つもの」であるはずはないが、その両者が「こんな古いものが役に立つもの（である）」と結び付けられている。例8では、自他共に認めるように、「（この）私」が「（そんなことに）構うもの」であるはずはないが、「（私がそんなことに）構うもの（である）」と結びつけられている。また、例16では、「あんなものの娘を貰うもの」がいるはずがないのに、そのいるはずのないものを故意に強調して「誰が」と問い立て、それが「あんなものの娘を貰うもの（である）」と結びつけられている。

その二は、上のように結びつけられた「Xが 連体修飾節+もの（+である）」の全体を、助詞「か」が意味的に包み、疑問の対象（スコープ）としてしていることである。ことさら矛盾する「X」と「連体修飾節+もの」を「XがYだ」という形で結びつけた上で、

そのようなことがあり得るかと問い立てていることになる。導き出される回答は、当然否定的なものになると予想される。この場合、「Xが」を「Xは」としたらどうなるか。「Xは」が疑問のスコープに入るかどうか、議論の分かれるところであろうが、ここでは、少なくとも一旦はスコープからはずれると考えておく。反語文で、「Xは」でなく、基本として「Xが」が用いられるのは、そのためではないだろうか。

その三は、「ものか」の反語文に限らず、反語文において、特有のプロミネンスが置かれることである。ここでは、とりあえず「ものか」の反語文に絞って論ずることにすると、そのプロミネンスの置かれ方に二つのパターンがあるようである。まず、文中に疑問語が存在しない場合は、「ものか」の「もの」の部分、又はその直前の、前接する連体修飾節中の述語にプロミネンスが置かれる。「彼がそんなことを言うものか」「彼がそんなことを言うもんか」「そんな所から飛び降りる奴があるものか」「そんな所から飛び降りる奴があるもんか」など。また、文中に疑問語が存在する場合は、その疑問語にプロミネンスが置かれる。「だれがそんなことを言うものか」「そんなこと、だれが知るものか」など。反語文におけるプロミネンスが特有と言うのは、それが、普通のプロミネンスと比較して、音の高低差・強さが更に大きいと見られるからである。「これは私が今日買ってきたものだ」(平叙文、プロミネンスなし)、「こうなれば、こっちのものだ」(平叙文、普通のプロミネンス)、「そんなこと構うのですか」(反語文、反語文のプロミネンス)の三つの文の「モ」の発音、また、「だれかが来た」(平叙文)、「今日はだれが来ますか」(疑問文)、「だれがそんなことを言うのですか」(反語文)の三つの文の「ダ」の発音を比較してみれば、そのこと

が了解されるのではなからうか。反語文、とりわけ「ものか」の反語文における特有なプロミネンスが何を意味するものであるかは慎重に検討する必要があるが、ここでは、「X」又は「連体修飾節+もの」の一方を、より強くないしは感情的に強調して、「Xが」連体修飾節+もの(十である)という結びつきの矛盾を一層際立たせる働きをもつものと考えておく。

以上により、IIの形の「ものか」の文が反語の意味を表すに至る事情はおのずから明らかになったと考える。

## 六 「ものか」の反語文の一特徴

「ものか」の反語文の特徴で、更に一つ触れておくべきことがある。それは、「もの」に直接する活用語が常にル形をとっているということである。

17 「それで地蔵様は動いたの?」「動くもんですか」(猫)

18 「ある日藤さんが散歩に出たあとで、よせばいいのに苦沙彌君が一寸盗んで飲んだ所が……」「おれが鈴木味の酎杯を飲むものか、(略)」と主人は突然大きな声を出した。(猫)

これらは、相手がタ形の動詞を用いて表した過去の事柄に関して、いずれも、「(Xが)ル形動詞+もの(十である)+か」の形で答えている。このことは、「ものか」の反語文が、「X」について、それが、テンスを超越した、ある一般化した性質をもつ何か(存在)であるかと問う(そして、自らそれを言外に否定する)、一般論の世界の表現であるということの意味しているのではあるまいか。もともと、例えば、例17、例18を、「(地蔵が)動くか」「おれが味酎杯を飲むか」のように、「か」の反語文に変えても、やはり、「か」

の直前の活用語はル形をとるようなので、これは「ものか」の反語文だけの特徴ではないかもしれないが、「ものか」の反語文で特に顕著であるとはいえるであろう。

ところで、論理の世界の表現といっても、表現のあやでそのような体裁をとっているだけで、事実上、「ものか」の反語文が現実の時（テンス）にかかわる事柄に関して何も表現しないというわけではもちろんない。例えば、例17では、「地蔵」が動く存在であるかどうかを一般論として問題にする体裁をとっているが、結果として、言うまでもなく「地蔵」はその問題のとき動かなかったということを表していると思われる。また、

19 さあ云えだなんて、そんな横柄づくで誰が云うもんですか。

〔猫〕

では、「誰」がそんな横柄づくな質問に答える存在であるかを一般論として問題にする体裁をとっているが、結果として、自分は絶対に答えないつもりだということを表していると思われる。

## 七 有題の「ものか」の反語文

これまで、無題文であるⅡを「ものか」の反語文の標準的な形と考えてきたが、題目を備えた「ものか」の反語文がないわけではないようである。ただし、出現頻度はそれほど高くない。「吾輩は猫である」では、先に見たように、「ものか」の反語文62例中1例で、これは既に例1として掲げた。また、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」中の、純粹に「くものか」の形（くものですか）などを含まない例を調査したところ、全274例中、題目をもつもの（対比強調のものを除く）は、6例であった。その全例を次に掲

げる。

20 人殺しの罪は変わるものか。（芥川龍之介「好色」）

21 もともと、正室、側室に上下はあるものか。（司馬遼太郎「国盗り物語」）

盗り物語）

22 相談などは、おのれらにするものか。（同）

23 あなたがおとなになったら、私はもう決して、よそへなんかいくものか。（田 辺聖子「新源氏物語」）

24 こんなことはあてになるものか。（武者小路実篤「友情」）

25 自分はもう杉子のことなんか思っちゃるものか。（同）

このような例が存在することをどのよう<sup>1</sup>に考えたらよいだろうか。

筆者は、Ⅱを退けて、ことさらⅠを「ものか」の反語文の標準的な形と考える必要はないと考えている。

まず、これらの文の題目は、いずれも、本来「X」が連体修飾節のもの（である）か」というⅡの文の中に収まる要素が取り立てられたものと見なすことができる。例1は「X」にかかる連体修飾節中の要素を題目に掲げたもの、例22は「もの」に前接する連体修飾節中の要素を題目に掲げたもの（ただし、「X」が「だれが／私が」は省略されている）、残る5例は、本来の「X」そのものを題目に掲げたものと見られる。

また、題目を備えた「ものか」の反語文は、相対的に、数も少なく、実際の例を見ると、表現にどこか不自然さのあるものが多いように感じられる。題目を備えた「ものか」の反語文が存在するのは、反語文でも、時に、何らかの理由で、題目を立てて言わなければならない必要が生じるため、そのときは、Ⅱを変形する形で文が作られるといった風に考えておきたい。

## 八 おわりに

以上、いわゆる「ものか」の反語文について、本来の文構造を考え、そこから、反語の意味が生まれてくる仕組みを考えてみた。

「ものか」の「もの」が名詞性を失いかけていることは否定しようのない事実であろう。しかし、「ものか」の反語文には、文末に「ものか」という一つの終助詞が付いてできただけでは済まされない、様々な、本来の構文論的な姿の痕跡が残されているように思われる。「ものか」を、今しばらくは連語というあいまいな扱いにしておくのも、それなりに意味のあることかもしれない。

なお、反語文は、「ものか」のそれに限らず、上代語から存在するものであるから、その研究は、上代語を資料とするところから出発すべきであったかもしれないが、用例が得やすいこと、プロミネンスの観察に有利なことなどの理由で、とりあえず近・現代語を資料として考察を進めることになった。これには、古典語と近・現代語の間に、「ものか」の反語文の基本的な構造の上で一貫するものがあるだろうという想定があった。このことは、当然、通時的な考察によって確かめられなければならないであろう。

その他、そもそも反語文とは何か、「ものか」の反語文はその反語全体の中にもどのように位置づけられるはずのものかなど、まだまだ考察すべきことは少なくない。すべて、今後の課題としていきたい。

## 注

- (1) 一例を挙げれば、保科（一九二一）、木枝（一九三七）、時枝

（一九五〇）、鈴木・林（一九七三）／松村（一九六九）、松村（一九七二）、中田・和田・北原（一九八三）など。山崎（一九五八）には、「名詞「もの」と助詞「か」の結びついた「ものか」もまた、「かしら」と共に、話手の気持を直接的に表わす助詞であることに変わりありません」とある。

(2) 例えば、時枝（一九五四）では、「人はなれたるところに心とけて寝ぬるものか（源氏 夕顔）」について、「寝ぬるものか」は「寝ぬるものなるか」の省略であるとしている。

(3) ただし、共通語でも、「さあ、それは、どうだか」のように、慣用的に「くだか」の形を用いる場合がある。

(4) 「内の関係」「外の関係」の用語は、寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（くろしお出版 一九八四年）による。

(5) 拙論、「のだ」の文について（『国文学研究』77 一九七五年）、「いわゆる解説的用法の「ものだ」の文」（『十文字国文』第8号 二〇〇二年）参照。

(6) 湯沢（一九三六）では、「さうして居るといふ事があるものか」（近松歌舞伎狂言上）などの「ものか」について、一語の助詞として扱いつながりも、「この場合の「もの」は、未だいくらか本来の意を保って、上の「事」を承けて居ると見られる様である」としている。

(7) 「総記」の考え方は、久野暉『日本文法研究』（大修館 一九七三年）による。例えば、「会長は彼だ」に対応する「彼が会長だ」の「が」などは総記の「が」。

(8) 実は、反語文の裏返し「ものではない」の文の「Xが」にもプロミネンスが置かれるようであるが、文全体の音調は、総記の場合のそれとも、反語文のそれとも、異なるようである。

この間の事情については、更に検討してみる必要がある。

- (9) 山口(二〇〇〇)参照。  
 (10) ただし、このことはなお主観的判断の域を出ないと言わざるを得ない。今後客観的に証明されることを期待したい。

〈参考文献〉

- 保科孝一(一九二一)『日本口語法』(同文館)  
 湯沢幸吉郎(一九三六)『徳川時代言語の研究』(刀江書院)  
 木枝増一(一九三七)『高等国文法新講』(東洋図書)  
 時枝誠記(一九五〇)『日本文法 口語編』(岩波書店)  
 時枝誠記(一九五四)『日本文法 文語編』(岩波書店)  
 山崎良幸(一九五八)『現代語の文法』(武蔵野書院)  
 鈴木一彦、林巨樹編(一九七三)『品詞別日本文法講座 助詞』(明治書院)  
 松村明編(一九六九)『古典語現代語 助詞助動詞詳説』(学燈社)  
 松村明編(一九七二)『日本文法大辞典』(明治書院)  
 中田祝夫・和田利政・北原保雄編(一九八三)『古語大辞典』(小学館)  
 森田良行・松木正恵(一九八九)『日本語表現文型』(アルク)  
 グループ・ジャマシイ(一九九八)『日本語文型辞典』(くろしお出版)

版)

- 山口佳也(二〇〇〇)『もの』の用法概観』『私学研修』第154・155号(私学研修福祉会)  
 日本語記述文法研究会(二〇〇三)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』(くろしお出版)

\*On Rhetorical Interrogative "Mono Ka" Sentence

\*\*Yoshiya Yamaguchi (Japanese Language and Literature)

キーワード ものか 反語文 名詞文